変化する表情への敏感性

他者からの否定的評価に対する不安との関連

○池田慎之介¹

(¹ 東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会)

キーワード: 表情, 社会不安

The sensitivity to the transition of facial expression

Shinnosuke IKEDA¹

(¹ Graduate School of Education, Univ. of Tokyo, Japan Society for the Promotion of Science)

Key Words: facial expression, social anxiety

目 的

他者の表情から感情を読み取ることは、円滑な社会生活を送るために重要であろう。ただし、その表情も、必ずしも信用でいる手掛かりとは言えない。幼児期以降、表情は様々な動機に基づいて調整される (Cole, 1986; Matsumoto et al., 1998)。さらに、様々な表情の中でも、特に喜び感情を反映した笑顔は、意図的に作り上げられることが多いとされている (Bugental, 1986)。ただし、こうして意図的に作り上げられた笑顔は、目が笑っていないことが特徴であるとされている (Gunnery & Ruben, 1986)。

さて、Ishii et al. (2011) は、笑顔がなだらかに中立顔へと変化する動画を見せ、喜び感情が消失したと感ずる点で止めさせる、という課題を日本人とアメリカ人に対して行った。その結果、日本人の方が喜びが消失したと判断するのが早く、またその早さは、アタッチメントの不安傾向によって媒介されていた。

Ishii et al. (2011) では、笑顔全体がなだらかに中立顔へと変化する刺激を用いていたが、もし相手が笑っているかどうかの判断が目によってなされるのであれば、目部分の変化について、より敏感であると考えられる。そのため本研究では、笑顔全体が変化する動画に加え、目のみが変化する動画、口のみが変化する動画も用い、社交不安傾向との関連を検討する。また、社交不安を測る尺度として、特定他者とのアタッチメントではなく、一般他者からの否定的評価に対する不安を測定する FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いる。

方 法

関東圏の大学に通う大学生 35 名 (男性 12 名, 女性 23 名) が実験に参加した。参加者の平均年齢は 19.71 歳 ($SD = 0.89$) であった。刺激として、女性 4 名の喜びと中立の表情写真 (ATR-Promotions, 2006) を用いた。各表情写真の目の部分を切り取り、もう一方の表情に貼り付けることで、目のみが喜びを表す写真と口のみが喜びを表す写真を作成した。さらに、FantaMorph ver.5.4.8 を用い、それらの写真を合成することで、笑顔全体がなだらかに中立表情へと変化する動画、目の部分のみが中立へと変化する動画、口の部分のみが中立へと変化する動画を作成した。動画はいずれも 100 フレームであり、再生時間は 6.67 秒ほどであった。動画は PC のモニター上に横 15cm×縦 20cm 程の大きさで提示された。

参加者は初めに、FNE 短縮版に回答した。その後別室に移動し、個別で実験に参加した。初めに動画を 1 度再生したのち、もう一度再生し、喜び感情が消失したと感ずた点で止めさせた。動画の提示順はカウンターバランスをとった。動画を停止したフレーム数を 101 から引くことで消失得点を算出した。消失得点は 1 から 100 の範囲で、高いほど消失したと判断するのが早かったことを意味する。

結 果

FNE 得点の平均は 38.77 ($SD = 8.64$) であった。また消失得点の平均は、全体消失は 30.07 ($SD = 10.94$)、目消失は 19.45 ($SD = 14.88$)、口消失は 23.56 ($SD = 12.10$) であった。FNE 得点とそれぞれの消失得点との相関係数を調べたところ、全体消失条件では $r = .298$ ($p = .082$)、目消失条件では $r = .330$ ($p = .053$)、口消失条件では $r = .162$ ($p = .350$) であった。これらの結果から、社交不安を感じやすいほど、早い時点で喜び感情が消失したと判断しやすいこと、また目の部分の変化には敏感であるが、口部分の変化と社交不安には関連が無いことが示唆された。消失条件間の相関係数を調べたところ、全体消失と目消失では $r = .495$ ($p = .003$)、全体消失と口消失では $r = .644$ ($p < .001$)、目消失と口消失は $r = .656$ ($p < .001$) であり、全体的に高い相関が見られた。つまり、笑顔の消失への敏感性は、個人内である程度安定していたと言える。

最後に、各消失条件の消失得点について、条件 (全体, 目, 口) を要因とした、1 要因 3 水準の参加者内分散分析を行った。その結果、条件の主効果が有意であった ($F(2, 68) = 14.80$, $p < .001$)。多重比較の結果、消失得点は全体 > 口 > 目であった ($ps < .05$)。つまり、目と口が同時に変化した場合に最も喜び感情の消失に敏感であり、さらに目に比べると口の変化に敏感であると言えるだろう。

考 察

FNE 得点と消失得点を検討した結果、他者からの否定的な評価に不安を感じやすいほど、目の部分が喜び感情を表しているかどうかに敏感であることが示唆された。またその一方で、口の部分の変化への敏感性とは関連が見られなかった。これは我々が、相手の笑顔が喜び感情を伴う真の表情であるかどうかを目の部分で判断しており、また他者からの否定的な評価に不安を感じやすいほど、相手の見せる笑顔が本当のものであるかどうかについて敏感であり、その結果、目の部分の変化に対してより敏感になってしまうためであると考えられる。また条件間の比較から、目よりも口の変化の方が早い段階で喜び感情が消失したと判断されていた。これは、喜び感情の認識自体には目よりも口の方が大きな役割を示しているという知見 (e.g., 池田, 2018) とも整合的なものであろう。今後は、他の表情においても、社交不安と関連が見られるか検討していく必要がある。

主な文献

- Ishii, K., Miyamoto, Y., Niedenthal, P. M., & Mayama, K. (2011). When your smile fades away: Cultural differences in sensitivity to the disappearance of smiles. *Social Psychological and Personality Science*, 2, 516–522.